

最近のソビエト散文における 俗物根性 (МЕЩАНСТВО) の問題

小 野 理 子

〔1〕

Г. ニコラーエワが長篇『闘いはやまず』(Битва в пути) を発表したのは、1957年であった。スターリンの死の夜のモスクワという、きわめてショッキングな場面ではじまるこの小説は、しかし単なる暴露的読物におわらず、機能上の欠陥にはそしらぬ顔で生産台数を上げる実力者のトラクター工場長や、それがまかり通る周囲の状況を、一人の主任技師の抵抗を通じて描き、現代ソビエト社会に生きる人間の政治的責任と主体性を、深く経済構造にまで眼をすえつつ問いかけた点で、まさに無葛藤理論克服の記念碑的作品となったのであった。

官僚主義や、生産現場での指導上の欠陥を批判する文学作品は、すでに1950年頃から目につきはじめていた。オヴェーチキン（オヴエチキン）の農村ルポルタージュ、アントノフの『長雨』(Дожди, 1952) やテンドリャコフの『悪路』(Ухабы, 1953) 等の一連の短篇、また、ニコラーエワ自身の『MTC 所長と主任農業技師の物語』(Повесть о директоре МТС и главном агрономе, 1954) などがそれである。しかしそれらはほとんど批判の対象を個人や極く一部の現象に限定していた。否定面が否定面として、正面きって追求されるのは、やはり1954年の第2回全ソ作家大会と、とりわけ1956年の第20回ソ連共産党大会を経てのちのこととなる。それは、個人崇拜のもとでの不正義——社会主義的民主主義の原則からの逸脱——に対する告発ともなり、一方では、アクション（アクション）フら若い世代の、自分たちは違うんだ、自分たちはもっと違った生き方をしてみせるんだ、という強い自己主張ともなって、50年代後半から60年代初頭にかけてのソビエト文学をいろどったのであった。

しかし、過去と周囲を批判した眼は、やがて現在と自分自身に向かずにはいない。60年ごろを境に急速にひろまって来た現代ソビエト人における小市民性・俗物根性——すなわち мещанство の批判的追求の傾向は、いわゆる「新し

い人間像」「現代の英雄」の探求と表裏一体をなして、今日のソビエト文学の中心問題となったと言えよう。

しかもこれが、ソ連社会で物質的安定と科学技術の驚異的進歩がたたえられ、わが国はすでに階級対立を止揚し全人民国家として共産主義建設の時代に入った、とソ連政府ならびに党が宣言したのと、ほぼ時期を同じくしておこったことを見逃すわけには行かない。(ヴォストーク号—1961年、新綱領採択の第22回党大会も同年。)

アグロノフスキーというオーチュルク作家の書いた『未来からのルポルタージュ』という本に、僻地に赴任した娘が非常な高給を取るの、古いボリシェビキである両親がおどろく場面があった。わたしたちは革命のために働いてお金をもうけようなんて考えもしなかった、と母親が言うと、父親の方が、いや、当時ソビエト権力には金を支払おうにもその力がなかったただ、今は払えるんだからいいじゃないか、とんだめるのだが、生産力の向上とそれに伴う物質的繁栄を共産主義への至上の条件として、給与にも物質的刺戟を大幅にとり入れ、生活がゆたかになりさえすれば人間精神は向上するのだ、といった理論は、60年頃からようやく支配的になりつつあった。(その中心が時の首相兼党第一書記フルシチョフであったことは言うまでもない。) そのような中で文学が、逆に人間のうちにひそむ遅れた部分——*мещанство* を主要なテーマにして行ったということは、常に現実の社会・素顔の人間から出発したロシア・リアリズムの伝統からすれば当然とは言え、興味深いものがある。先進的なべき革命五十年の社会に、未だこのような現象があり、こういう人間がのさばっている、これをいったいどう考えるべきか、どう解決すべきなのか——作家たちのこの問いかけと、それを受けとめる読者乃至は批評家の反応を、本稿では入手できた範囲の資料にもとずいて考察してみたい。

〔2〕

1963年に、ニコライ・デメンチエフ (Николай Дементьев, 1927 レニングラード生) という作家が、『タチヤーナ・ペローワの結婚生活』 (Замужество Татьяны Беловой) という小説 (роман) を出している。女主人公のタチヤーナは、レニングラードの労働者家庭に生まれ、製図係としてある研究所に勤めるうち、将来有望な青年技師にその美貌と才気を見そめられて結婚した。立派な住宅、可愛い子供、良人の愛、経済的安定——どこから見ても非のうしろの無い暮らしをしている彼女は、しかし自分の生活が何かもっとも大切なも

の——что-то самое главное——を欠いていることを感じており、その空しさが日を追うて強く彼女を苦しめはじめる。

腕ききの研磨工である実家の父は、申し分ない主婦の母親と二人、自力で郊外に家を建て、菜園をつくり、何不自由なく自分たちを育ててくれたが、今にして思えばあらゆる社会活動に——組合にも後輩の養成にも——そっぽを向き、ひたすら自己の巣を守って、「誰にも迷惑はかけず、誰からも迷惑を蒙らず」を最高のモットーに生きて来たエゴイストに過ぎなかった。(この父の俗物性への批判は、タチヤーナと対照的に早く親から独立する妹スベトラーナの言動を通して展開されるタチヤーナ自身、青年技師アナトーリイに接近し、^{こわく}蠢惑したのは、ものごころついた時から女の人生の目標として教えられて来た、有利で安易な生活を保証する結婚の条件に、彼がぴったりだったからだ。この小説は、タチヤーナの一人称で語られているが、作者デメンチエフは、アナトーリイとの愛の場面ですぐに彼女がためたく醒めて相手を観察しているさまをたくみに描いて、その「愛」が実は打算の上に構築されたものであることを、はやくから読者に暗示している。そして相手のアナトーリイもまた、そのような「愛」にふさわしい俗物であった。彼の関心は、準備しつつある博士候補論文の内容——物体の拡散に関する力学の法則——よりはむしろ、学位取得によって得られるもろもろの栄養と物質的充足、つまり快適な生活にあった。だから、論文審査の直前に共同執筆者のオレグが論文の結論に矛盾するあたらしい実験結果を測定し、学位取得をあきらめてその解明にとりくんだ時、アナトーリイは周囲の人の「まず学位を取り、そののち次の研究段階に進めばよい」というすすめに唯唯として応じたのである。

タチヤーナはそんなオレグにひかれ、一度は真実の愛を見つけた、と思う。が、学問上でも日常生活でも妥協を知らぬ奔放な生き方について行けず——オレグも彼女を愛していたのだが——俗物アナトーリイとの安定した結婚生活をえらんだ。そして今「28才で、美人で、申しぶんない健康体」のソビエト女性タチヤーナは、つまりわたしは生きているんじゃなくて、ただ存在しているだけなんだわ——Одним словом, существую, только существую.⁽¹⁾——と絶望の叫びをあげているのである。

これに似た表現は、現代ソビエト文学で一度ならず見ることができる。たとえば、かのテンドリャコフは、1959年、長篇『光陰矢の如くにして』(За бегущим днем)の第一章に、画家になろうと志して果し得ぬ若い主人公の感慨をこう書いている。Но существование—не жизнь.⁽²⁾ 存在は生活にあらず

……。

さて、『タチヤーナ・ペローワの結婚生活』の翌年、1964年3月号の雑誌《ノーヴィ・ミール》は、ヴィーリ・リパートフ（Виль Липатов, 1927 チタ生まれ）の中篇『他人』（Чужой）を掲載している。この作品は、発表直後から《文学新聞》や《コムソモールスカヤ・プラウダ》でおおいに問題にされ、その後もプロフマンらによって論じられているが、中年の機械設計技師チェレプニンが、みずから「中くらいの人間」——средний человек——と称し、むずかしい事はわからぬ、自分は食べて飲んで寝て働いて愛して本でも読んでるのが一番ふさわしいのだから、過大な要求をつきついたり英雄的生き方を求めたりしないでくれ、と主張し、そのような暮らしを通そうとして、妻や義理の息子サーシャのてひどい反撥にあう話である。

作者リパートフが、その頃中国で展開されていた「中間人物論争」について知っていたかどうか、仮りに知っていたとすればどの程度にか、残念ながら今のところ筆者にはまったく判断の材料がない。ただ、「平凡人のささやかな仕事」は、ロシア文学史上、1880年代の通俗作家ボボルィキンやポタペンコらによってひろくふりまかれ、ソビエト文学史家によって「典型的町人道德」とよばれている考え方であることを附言しておこう。ポタペンコの中篇『英雄ならざる者』（Не герой）の登場人物の「人にはそれぞれ自分を役立てることのできる小さな場所があり、どうしても大事業をやろうなどと考える必要はないのだ。何か役に立つことをしたまえ、それでもう君の存在のプラスがあったわけだ」と言ったせりふは、しばしば引用されるものであり、リパートフもおそらくはこうした事実をふまえてチェレプニンを創り出したと思われるのである。⁶¹

『他人』には、チェレプニンに対立する形象として、コムソモールの活動家で夜のパトロールをしているサーシャ、その母で、この小説の冒頭チェレプニンと再婚する女医のイリーナ、イリーナの母で元小学教師エレーナおばあさんの三名からなる「オゾーリン一家」が置かれている。彼らは町の人びとに敬愛され、おたがい同士もびったり気の合ったうちうち——свои——であり、そこに入りこんで来たチェレプニンは、遂に他人——чужой——の域を一步も出ることができなかった。教養やスマートな外貌や人づきあいのよさにもかかわらず、彼の本質が結局オゾーリン一家の人間性、ひいてはソビエト社会そのものとあいれぬ мещанин であったからだ、と作者リパートフは言おうとしているようである。設計技師としては一流の能力をもち（若い設計士が困っている図面をひと目みて、間違いを指摘してやる場面）、主任技師の椅子に野望がな

いわけでもないが、決して無理はしない。それより五時になれば緑にかこまれたオゾーリン家に帰り、エレナおばあさん手作りの冷スープに舌つづみをうち、樹蔭の揺り椅子にすわって、魅力的な妻を相手に警句をとばしている方が、ずっと快適だからである。チェレプニンはあらゆる種類のファナティクを軽蔑し、人生によけいな摩擦をおこさぬことを最上とする。浮気をしても、妻に知れて彼女を苦しめるようなことがなければ、かまわない……。

チェレプニンのこの事なかれ主義・人間的頽廃を、批評家スミルノワは、リパートフが「われわれ一人一人につきつけた」問題としてとらえている。しかし一方で、ソビエト社会には一般的に言って「このような *мещанин* が育つ基盤は無い」のだから、彼の特殊なバイオグラフィがもっと書きこまれていなければならない、と主張する。⁽⁴⁾

これに対しドッジンツェフは、『他人』の作者が、作中のオゾーリン一家と一緒にあってチェレプニンを厳しく批判しようとするあまり、せっかく立体的に描き上った、かなり魅力ある人物であるチェレプニン像に、強引に欠陥を押しつけすぎた感がある、と説く。また今日、チェレプニンの好む緑深い庭や揺り椅子や、サーシャの恋敵である教授の息子が乗りまわす自家用車でもって、*мещанство* の指標とするのは、陳腐ではないか、作品の弱さはむしろ、作者が肯定的人物として押し出そうとしているオゾーリン一家の形象が、「アンケート的」——エレナおばあさんのつれあいは革命家だったとか、イリーナの亡夫は勇敢な将校として大戦で戦死したとか——に終始し、実際の行動を通して思想を展開するに至っていない点にある。例えば隣家にはスターリン時代はばをきかした官僚主義者が居て、その子供はすっかりぐれているのだが、その子に援助の手をさしのべることもしないで自分たちの「革命的家庭」を守って来たオゾーリン一家は、チェレプニンに負けない *мещане* 以外の何者でもあるまい、とドッジンツェフは喝破している。⁽⁵⁾ 現代における肯定的主人公の発見は、けだし至難の業と言うべきであろうか。

〔3〕

かつてゴーリキーが、世界文学史上はじめて階級的な光をあてて『俗物根性覚え書』(Заметки о мещанстве, 1905) を書き、人類の進歩を妨げる反動的イデオロギーとして *мещанство* の本質を完膚なきまであばいた時、その特徴はおおよそ次のように列挙されていた。すなわち、奇形的なまで発達した所有感覚；自己の内外の平安を守ろうとの希求と、その平安を乱しうるあらゆる事態

へのたえない恐怖；これまで保ってきた精神的バランスや人生への自己の判断を狂わせるような事にでくわすと、一刻もはやくその説明を求めて焦るが、それは新しい事を正しく理解しようとしてでなく、単に自己弁護の必要からである……等。^[6]（20年後に書かれたクリム・サムギンの形象が、これらの性質をあまねく附与されているのは興味深い。）

由来、所有欲は俗物根性の筆頭に挙げられて来たものであり（ゴゴリ、トルストイ、チューホフ、そして今世紀初頭の、批判的リアリズムの流れをくむ作家たちも例外ではない）、ゴーリキーの新しさは、これを人間の本性とか、個人の資質とかに帰するのでなく、人間が人間を搾取して肥る階級社会の、支配階級の属性として明確にした点にあった。

しかし、それから六十年を経て、ソ連邦の版図では搾取関係が存在しなくなった今、俗物根性をあいかわらずみがかれた家具や窓辺の花や、美味飽食や自家用車で象徴させることに疑問を抱くのは、ドゥジンツェフ一人ではない。物と人間との関係を執拗に問うた近作には、たとえばエヴゲーニイ・クトゥゾフの『敷居にたたずむな』（Не стой на пороге, 1967）があげられる。

主人公である若いジャーナリストのセルゲイは、腹一杯たべ、土曜には風呂に入ってビールを飲み、スポーツ欄を読み、時には投書をし、宝くじを買ってひょっとしたらモスクビッチ（小型乗用車）が当たるかも、と胸をときめかせているような、多くの人の俗物的暮しを軽蔑している。しかしまた、今は年金生活者の母親が、民生委員のような仕事をかって出て、親のない少女に奨学金を取ってやったり、いろいろ苦心していることにも冷淡だ。母親はそんな息子をたしなめて、俗物根性は人間の物に対する、あるいは他の人間に対する態度の中に求めるべきもので、物自体にあるのではない、人間は可能な範囲で便利に美しく暮らそうとするのだし、そのことは何ら人間を卑しくするものではありません、と言う。これに対してセルゲイは、人にはそれぞれ持ち分があり、世界はそれで保たれている。誰も彼も創造的な仕事ができるわけでなし、電車の車掌が宇宙の神秘をときあかそうと腐心するのはこっけいなだけだ、と答える。人それぞれの持ち分——каждому свое——という思想は、『他人』のチェレブニンに通ずる。実際セルゲイは、編集局に来た投書によってある工場の大きな不正事件の調査に派遣された時、たしかに不正はあると感じながら、証拠がための困難さの前に、編集長の暗暗裡のもみけしの意向に従っていかげんな記事でお茶をにごすのだ。どうせ力の及ばぬことはやめておく、というこの主人公の哲学は、同じ事件を追求して逆に中傷記事捏造の責任を問われた同僚記者

や男まさりの仕事にぶつかって行く主人公の恋人ナターシャを通して批判されているが、主人公は、結局、編集局をやめてパミール探険隊に志願し、新規まきなおしをはかる、というところまでしか書いておらず、物質的充足がはたして人間精神を高めるものか蝕ばむものか——女性の化粧やモードと俗物根性に関するナターシャの議論もふくめて——は、作者にとっても未解決のままに残されたようである。

このほか Ю. カザコフは、56年の『小駅にて』(На полстанке) 以来、61年の『ケ・セラセラ』(Трали-вали), 62年の『アダムとイヴ』(Адам и Ева) と一貫して、才能ある個人が社会との相互関係において問われるべき責任について追求しつづけており、Д. グラーニンが科学の世界での мешанство に正面からいどんだ長篇『雷雨について』(Иду на грозу) は、1962年度のソビエト読書界を文字どおり席卷したのであった。(この年の暮れに ソルジェニツィンの『イワン・デニソビッチの一日』が出ている。)

さらに前出 С. アントノフの近作『裂かれたルーブル札』(Разорванный рубль, 1966) は、人間が人間に対して友であるべき社会主義社会における、許すべからざる背徳の女性関係を取りあげ、新人 Вл. マカーニンは、長篇『一直線』(Прямая линия, 1967) で、グラニンやデメンチエフの主人公たちよりさらに一世代若い二人の数学者を主人公に、今日の知識人青年層の生活意識を浮き彫りにしてみせている。また Ч. Айтматовの『さらば、グリサルィ!』(Прощай, Гульсары! 1966) は、広大なキルギス高原を背景に、名馬の一生という特異な世界を描きつつ、ソビエト市民の責任を、共産党員のそれとしてきわめて高次の段階で煮つめようとした力作であった。

[4]

上記のいくつかの作品の概観からも察知されるように、文学があくまで人間という具体的な形象を通して作者の芸術的イデー(эстетический идеал)を表現するものである以上、現代社会における мешанство を追求しようとするれば、かならず主人公の問題が生じて来る。

すでに 1959 年の第 3 回全ソ作家大会に際して、ソ連共産党中央委員会は、勤労人民の英雄性と、共産主義をめざす闘争の偉大さをはっきりと示すような文学作品を期待する、というメッセージを送っていたが、1962年、63年になると、フルシチョフ、イリイチョフ(当時イデオロギー問題担当の党書記、65年解任)ら党と政府の幹部が、文学者・芸術家と数次にわたる会合を持って、文

学・芸術がもっと緊密に人民の生活に結びつくならば、上記目的の達成はかならず可能であると強調した。

凡百の作家の眼にはただ挫折と混迷のみが映じていた今世紀初頭のロシアにおいて、ゴーリキーが『小市民たち』(Мещане)のニールを見出し、『敵』(Враги)の労働者群像を見出し、『母』(Мать)のヴラーソフ母子を見出したように、すでに今現実のソビエト社会に生まれつつある「明日の人間」——共産主義的人間像を発見し形象化することは、たしかに60年代ソビエト作家の最大の課題であろう。また、そこにこそソビエト文学が世界文学の中ではたす先進的役割があるとする、ソビエト文壇の気負いも、理解できなくはない。事実、A. クズネツォフの『伝説の続き』(Продолжение легенды, 1957)の若者や、B. コジェヴニコフの『バルーフです、よろしく』(Знакомьтесь, Балуев! 1960)の幾人かの中心人物、B. ビエドヌィの『娘たち』(Девчата, 1961)の愛らしいトーシャは、われわれ資本主義国に育った者の思いもよらぬ、集団主義的人間の美しい断面をかいまみせてくれたのであった。

しかし、芸術的イデーの表現が、時にはグロテスクな否定的人物や、抱腹絶倒の諷刺劇の形をとることが忘れられ、一方的に社会の肯定面だけを押し出すことが作家の党派性であり人民性であるかの如く言われかねなかったこの60年代中葉に、テンドリャコフが『かげろうの命』(Поденка—век короткий, 1965)を書き、B. ショーミンの『一つ家の七人』(Семеро в одном доме, 1965)が出たことは、注目にあたいする。

テンドリャコフのこの中篇は、コルホーズの養豚係としてすばらしい繁殖成績をあげて労働模範になり、コルホーズあげての結婚式を祝われ、畜産活動者会議のはなばなしい演壇に立ち——という、一見、われわれがよくグラフ誌などで見る、健康美あふれるソビエト女性の典型のような女主人公ナスチャが、途中からいつわりの記録の上にまつりあげられ、権力におもねるコルホーズ議長にあやつられて、ついに豚舎に火を放って破滅するにいたる悲劇を描いたものである。

もともとナスチャは、おとなしい娘だった。戦争で婚期に遅れ、病身の母をかかえて、仕事のできる娘と言われることだけに生きがいを感じていた。気に入りの豚に、失恋した男の名をつけて可愛がり、管理部の怠慢で薬品が間にあわなければ、町の薬局に出かけて身銭を切ってまで、疫病の蔓延をふせいだ。そのような彼女の善意を、議長は最大限に利用し、好結果はコルホーズのものにし、責任は個人に負わせる。そのためナスチャは、仔豚の屍骸を秘密に埋め

て、頭数の水増しをすることをおぼえ、次第に深みにはまって行く。その一步一步追いつめられて行く心理描写は、この作者ならではの迫力であるが、同時に、ナスチャの成績を「コルホーズの旗」として宣伝しながら、嘘が発覚しても一切責任は自分にかからぬようにしている典型的な官僚主義者の議長、さらに議長をしてそのような処生術を身につけさせた、国家の農業行政そのものへの批判にも、たしかなものを感じさせる。

他方 B. ショーミンは、もっと自然主義的な手法で、ウォトカに明けウォトカに暮れる、しかしこれも階級を問うならソビエト労働者階級以外の何者でもない人びとの日常を、えんえんと描写してみせた。《ノーヴィ・ミール》誌でたっぷり80頁分書きこんだこの中篇（повесть と名づけられている）には、家族のいさかい、隣人の軋轢、アルコール中毒、はては殺人事件まで登場するが、大きな筋の展開はなく、読者は、何ともやりきれぬ読後感を味わいつつ、この連中にくらべたらそれでも自分の方がましだ、と思うのではなかろうか。

これらの作品に対しては、積極的評価とならんで、むしろ手きびしい批判が待っていた。新聞《農村生活》は、テンドリャコフを「誠実に人民に奉仕しているコルホーズを侮辱する作家」と非難したと伝えられ、^[7] ショーミンに関しては、《文学新聞》が7月末から3回にわたり4名の執筆者をつらねて『一つ家の七人』批評特集を行ったが、^[8] その途中で《プラウダ》がルキーン署名の『単なる真実のみせかけ』（Лукин Ю., Лишь видимость правды, 11 авг. 1965）を發表したのである。

前者のテンドリャコフ非難は、ソ連で時にみうける、文学作品をあまりに現実ひきつけた読み方から生じた事件だが、後者の議論は否定的現象を描く問題全般にかかわるものとして見すごすわけには行かない。

ルキーン論文の要点は、ショーミンが描いたような暗黒面——町はずれの住人の社会的無関心やアル中や殺人事件等——は、たしかに少しは存在する、が、これら「真実の断片」「瑣末の真実」（доля правды, мелкая правда）に眼をうばわれて、かえってソビエト社会の「大なる真実」（большая правда）を見えなくすることは正しくない、と言うにある。そして、酒をのむために働いているようなみじめな日常性に埋没している登場人物たち（とりわけ戦争の犠牲者たる「おふくろさん」）に対する作者の眼差しがあたたく、筆がうたがひもなく才筆であるだけに、こうした瑣末な真実の一面的描写は、「大なる虚偽」（большая неправда）に通ずる危険さもある、と主張する。

しかし、この論文は一つの重要なことを見落しているように思われる。それ

は、あらわれた形としては幸いに少数部分であっても、はたしてショーミンの描いた世界が、現在ソビエトの多数の人間の精神構造に、まったく無縁なのかどうか、ということである。

テンドリャコフの『かげろうの命』を読んだソビエト読者は、おそらく、かつて畜産を驚異的にのばしてフルシチョフ自らに英雄とたたえられたリャザン州の幹部が、実は隣の州からひそかに買入れたものを国家に納めていた事件を思い浮かべたであろうし、また、アルコールの弊害が、一部企業でかなり深刻な生産阻害要因になっていることが、ここ二・三年のソビエトの新聞では問題にされている。ショーミンは、多くの人間が潜在的な形でかかえている *мещанство* をむき出しにつきつけることによって、問題提起としたのではなかろうか。現象の根元をえぐるべき作者の眼があいまいで作品を低調に終らせているとしても、そのことは、このような現象を文学でとりあげるべきかとりあげるべきでないか、という議論では解決しないだろう。

既成画壇をすどく批判しつつ、自らも社会との間に確固とした紐帯を見出しかねている『アダムとイヴ』の画家の悩みは、この小説のすばらしい風景描写が示すように非凡の才を抱いた、カザコフ自身の苦悩をぬきにしては考えられず、『かげろうの命』の議長の形象は、ながく地方で組織活動に従事して来たテンドリャコフ自身のはげしい怒りなくして生まれ得なかったであろう。青年医師アクショノフの出発、物理学者グラネンの達成、また然りである。

批評家 H. ジュソイティは、文学の教育的効果を重視するあまり現実を理想化して描いてはならない、青年の教育は文学以上に実際生活の中で行われるものであって、現実美化の文学は、真実でないゆえにかえって青年をそこなう、とのべたが、⁹⁾ この一見きわめて常識的な見解が、今日ソビエト批評界においては、傾聴さるべき多くのものを含んでいると言わねばなるまい。

〔 5 〕

ジュソイティは『英雄の“両翼”』と題する上記の論文において、英雄についての古典的な分類（第一は民族叙事詩の英雄の肉体的優秀さや超人的知恵、第二は民謡や歴史物語中の一見ふつうの人間が、あるドラマチックな状況で発揮する英雄性）を見たのちに、一時流行した「われわれの生活自体が美的なのである」（Прекрасное—это жизнь）という考え方はまちがっている、この論法にしたがえば、よく働き、妻や子を愛し、といったごくありきたりのことが、あたかも英雄的行為のごとくになってしまうが、平凡な日常（будни）はしょ

せん будни にすぎず、英雄は英雄的状况においてのみ生まれるのだ、とのべている。

ジュソイティの言はそこで終るが、これをもう少しきつめて考えるならば、今日ソビエト文学が英雄性に乏しいとすれば、現実の生活自体があまりに日常的—будни—にすぎるとはならないか、という疑問に到達する。精神的に行きづまった主人公が探険隊に入って大自然に挑み、モスクワの俗物どもに反撥した青年がシベリアの建設現場にとびこんで新しい人間関係を発見する、と言ったテーマは、労働が人間をつくり、労働者の中にこそ労働者階級のモラルがあるという限りにおいて正しい。しかし社会の全成員がパミールやシベリアにおもむくことができない以上、モスクワの事務機の周囲にも英雄性は存在せねばならず、新しい共産主義的人間関係の確立、俗物根性の絶滅のためのたたかい、社会のあらゆる分野で行われねばならぬはずである。

現代ソビエトの代表的文芸評論家ヴィタリー・オーゼロフは、近著『ソビエト文学の半世紀』（Полвека советской литературы, 1967）で、「闘いのパトス」（Пафос борьбы）と題する一節をもうけ、「ソビエト作家たちは、現代性を相対立する諸側面・諸傾向・諸現象の闘争、敵対的ではないが極めて鋭い諸矛盾の闘争として描出することに、ますます確信を深めつつある」とのべている。しかしこの闘争は、オーゼロフによれば、「新しいもののための闘争」（борьба за новое）と規定される。「ソビエト文学の肯定的主人公の活動のもっとも主要な点を一言で言うるとすれば、新しいもののための闘いのパトスとして規定するのが一番適当だろう。経済における、政治における、生活習慣における新しいもののため、人間相互の関係における新しいもののため、自分自身の内なる新しいもののための……」¹⁰⁰

そして、それをさまたげる旧習墨守者（рутинёры）とたたかわねばならぬ、と言うオーゼロフは、しかし、矛盾が敵対的でない、というテーゼにこだわるゆえに、激しい階級闘争を反映した20—30年代文学の緊張とドラマチズムを現代文学が欠くことを認めつつも、それを心理描写の充実その他のむしろ技術的な方向で解決しようとするのである。

また、1967年1月27日の《プラウダ》無署名論文『時代から立ち遅れるとき』（Когда отстают от времени）は、現代文学の欠陥は文学が時代に立ち遅れていることとむすびついている、これは単に現実の反映がおそいと言うにとどまらず、一部の文芸雑誌の美学的なものの見方が現代の要求に立ち遅れていることを意味する、として、《ノーヴィ・ミール》誌と《オクチャーブリ》

誌をともに批判し（前者には現実描写の一面性、後者には主観的批評と芸術的に低い作品のあることのゆえに）、両誌が不必要な対立をやめて団結するようによびかけているが、この場合は、何に対して団結するか、と言えば、敵は外国のブルジョワイデオロギーである。それは「現在、社会主義が世界発展に寄与するのは、何よりも自己の範例の肯定的力によってであるという認識」から出発しており、外部からのイデオロギー侵略に対してソビエト文学の純潔性を守る、という立場に立っている。

この立場は、ソビエト連邦におけるマルクス主義美学の教典となっている『マルクス・レーニン主義美学の基礎』で、すでに見られたものであるが、⁴⁴第22回党大会後いっそう固定化された感がある。アイトマートフの『さらば、グリサルィ！』の主人公タナバイが、個人崇拜の極端にきびしい条件下に、コムニストの良心にかけてコルホーズを守ろうとした行為を、口をそろえて賞讃する批評家たちは、しかし、タナバイの苦しみの原因は幸いにも今や永久に根絶された、と断言する。⁴⁵だが完全に現代とかかわりあいのないことであるなら、なぜアイトマートフはこの小説を書き、なぜ読者は感動をもって読むのであろうか？

мещанство の問題を、精神構造の分野だけでとらえ、実践活動をぬぎにした文学の上だけのイデオロギー闘争によって追放しようとするのは、一種の観念論に墮するものではないかと筆者は危惧する。

『他人』のチェレプニンについてスミルノワも言った「このような мещанин の育つ現実的基盤が今のソビエト社会には無い」のかどうか、もう一度考えてみる必要があるだろう。

批評家の中には、闘いの必要なことはわかるが、相手（敵）が明らかでないので、мещанство に対する闘いを外国文化一般やインテリゲンチヤ全体への攻撃にすりかえてしまう場合さえ見うけられる。例えばロバーノフの『開化俗物根性』（Просвещенное мещанство）は、現代の俗物根性がさまざまな文化的・科学的な言辭を弄することを指摘したのち（実はこれは“現代”にかぎらないのだが）、彼が最近故郷の村で会った、12個の勲章を持つ大戦の勇士で黙々と仕事にはげむ農民を紹介し、トルストイ描くところのトゥーシン大尉を彷彿とさせるこのような人物こそがロシアを救って来たのであり、我が国民の信念と希望である、と結論している。⁴⁶これはいささか極端な例であろうけれども、「ソビエト文化全体」と「外国ブルジョワ文化」を現代の主要な対立として一面化するならば、それはロシアの国民性への無条件復帰と容易に結合し

うることを示している。

また、このような「保守主義」に対抗して、逆に科学・技術の進歩こそが現代社会の運動の決定的要因であるとする文学者も少なくはない。ヤノフは、肯定的主人公とは「美点のよせあつめ」ではなく、その人間の果す「社会的機能」によって決まるのだと主張しているが、20年代の英雄コルチャーギンの単なる自己犠牲では、現代社会の複雑な悪とは闘えまい、と言う。コルチャックやウランゲリや飢饉とたたかった集団〈мы〉の力でなく、現代科学に精通した創造的個性〈я〉が必要なのである⁴⁴——と。

この論文を掲載した《文学の諸問題》誌は、同時にモチャシヨフの討論を併載して、20年代主人公の集団主義と自己犠牲は没個性を意味するものでなく、かえってそうした闘争の過程で彼らの〈я〉は確立し、ゆたかになったことを立証せしめているが、ヤノフはもとよりモチャシヨフにしても、オーゼロフにしても、科学・技術の進歩をはじめあらゆる新しいもの〈новое〉は、不可避免的に階級性を帯びつつ人間社会で作用することを、ほとんど意識していないように見える。卑近な例をとるなら、企業へのオートメーションの導入という〈новое〉は、労働時間の短縮・作業の軽減をもたらすこともできれば、非人間的労働強化と巨大な利潤率の上昇をもたらすこともできるのである。したがって「新しいもののために」(за новое)というスローガンの基礎には、まず「誰のために」(за кого)という問題が横たわっているはずであろう。

「発展とは対立物の“闘争”である」(Развитие есть “борьба” противоположностей)かというレーニン哲学ノートの言葉は、事物の発展の原動力が内部にあることを意味している。外国からのイデオロギー侵略に対する防衛を強調する結果、ソビエト社会の中で現実にある矛盾を正しく把握し、それと正しく闘うことを軽んじるならば、ソビエト文学は萎縮を免れず、同時にそれは、一つの国には二つの文化——支配する者の文化と支配されるものの文化——があるとレーニンも指摘した、外国文化自体への認識をもあやまることになる。

мещанство をほかならぬ階級的なイデオロギーとしてとらえたゴーリキー以前の美学に逆行することなく、それとの闘いを位置づける時、現代ソビエト文学の主人公は、「存在」から真の「生活」の高みに飛躍することは疑いない。

注(1) Дементьев Н. Замужество Татьяны Беловой. Роман газета, № 5, 1964 г. стр. 90.

(2) Тендряков Вл. За бегущим днем. Избранные произведения в 2 томах,

- Гос. изд. худож. лит. М. 1963, т. 2, стр. 8.
- (3) См. Бялый Г. Основные направления русской прозы 70-80-х годов. В кн. История русской литературы, АН СССР, 1956 г, т. 9, ч. 1.
 - (4) Смирнова В. Под прицелом. Литературная газета 11 апр, 1964 г.
 - (5) Дудинцев Вл. Технолог Черепнин и его обвинители, Лит. газета 21 мая 1964 г.
 - (6) Горький М. Заметки о мещанстве. Собрание сочинений в 30 томах, Гос. изд. худож. лит-ры, М. 1953 г. т. 23, стр. 341.
 - (7) См. Румянцев А. О партийности творческого труда советской интеллигенции. «Правда» 9 сент. 1965 г.
 - (8) Фоменко Вл. Люди с окраины; Власенко А. Одна сторона правды (Лит. газета № 90, 31 июля 1965 г.): Оскоцкий В. Что может человек (Лит. газета № 92, 5 авг.): Воронов Вл. Окраина—не остров (Лит. газета. № 96, 14 авг) このうち Фоменко のものが積極的に作者を支持し, 他はおおむね批判的である。
 - (9) Джусойты Н. «Два крыла» героя. Лит. газета № 87, 26 июля 1966 г.
 - (10) Озеров В. Полвека советской литературы. Изд. «Советский писатель» М. 1967 г. стр. 434.
 - (11) Аникст А. Народность, классовость и партийность искусства. В кн. Основы марксистско-ленинской эстетики, Гос. изд-во Политической литературы, М. 1961 г. стр. 326-327.
 - (12) Янов А. Человек «для людей» и человек «для себя»; Мотяшов И. «Для людей» и значит: «для себя». «Вопросы литературы» № 7, 1967 г. См. напр. стр. 70.
 - (13) Лобанов М. Просвещенное мещанство. «Молодая гвардия» № 4, 1968 г. стр. 306.
 - (14) См. (12)